

2025 年 7 月 6 日（聖霊降臨後第 4 主日・特定 9、C 年）

牧師メッセージ

「願いなさい。行きなさい」

（ルカによる福音書10:1-11, 16-20）

司祭ヨセフ太田信三

七十二は異邦民族の数を表すと言われます。ならば、七十二人の弟子たちの派遣とは、全世界へ福音を伝えるための出来事だと解釈することができます。主イエスは派遣する七十二人に対し、宣教の旅において守らなければならないことを告げました。「収穫のために働き手を送ってくださるよう、収穫の主になさい。」とあるように、彼らはまず「願う人」であることが求められています。さらに「行きなさい。わたしがあなたがたを遣わす。」と続きます。つまり宣教に必要なのは、「願い」「派遣される」ことだと言われたのです。そして、願う先には神がおり、派遣するのは主イエスですから、宣教は弟子たちによるものではなく、その弟子たちを通して働く御父と御子の業だということです。

宣教者の後ろには神と主イエスとがおられる。それゆえ、「小羊」のように無力な人間であっても、「狼の群れ」からも守られ、使命を果たすことができるのです。背後に主イエスと神がおられるのだから、「財布も袋も履物も」必要ありません。むしろ自分の知識や経験、持ち物に頼るのではなく、積極的に主に寄り頼む宣教者を通してこそ、そこに神の働きが明らかにされるのです。

さらに弟子たちは、着いた先の家で「この家に平和があるように」と告げることが求められています。今日の福音の後半では、この七十二人によって「悪霊、サタン、敵」という、神と敵対する存在が屈服したことが報告されています。このことから、彼らが告げる平和とは、神と対立する力が滅ぼされた状態のことだと言えます。平和を求める神は、わたしたちの命を祝福し、他者との愛の交わりに生かそうとします。しかし神と対立する力は、人から神の祝福を遠ざけ、他者との交わりを断ち、人を孤独に追いやりまします。それゆえ、派遣された者たちは、分断の原因である「違い」を超えることが求められます。具体的には、派遣先の家でも町でも、「出される物を食べ、また飲む」こと、さらには「家から家へと渡り歩く」のではなく、関係に留まることが求められます。その交わりにおいて、人種、立場等あらゆる違いは、分断をもたらすものとしてではなく、多様な人々が共に食卓を囲む豊かさに変えられ、そこに神からの平和が実現することになるのです。

さて、派遣先から喜んで帰ってきた七十二人に主イエスは言います。「悪霊があなたがたに服従するからといって、喜んではいけません。むしろ、あなたがたの名が天に書き記されていることを喜びなさい。」悪霊を服従させた弟子たちは、自分が誇らしかったことでしょう。しかし、それをなさしめたのは神です。ですから、喜ぶべきはその行いではなく、神に憶えられていることです。

宣教とは御父と御子の業であり、わたしたちに求められているのは、その主に願い、寄り頼みつつ、この世界のあらゆる違いを超え、平和を告げることです。